日中友好のしんぶん
日本と中国

1｜1
2015年第1号　岐阜県版
発行：岐阜県日本中国友好協会
500-8117　岐阜県岐阜市南殿町2－10
TEL / FAX　058-240-0621

謹賀新年

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

新年のご挨拶

岐阜県日本中国友好協会
会長　杉山　幹夫

あけましておめでとうございます。

元日から雪と寒さに見舞われ、２０１５年は例年にない厳しい年の幕開けとなりましたが、皆様におかれましては、良い年を迎えられたことでしょう。

今年は戦後70年。日中関係は、昨秋のＡＰＥＣで両国首脳同士が握手を交わし、尖閣諸島をめぐる不測の事態は回避されましたが、好転するのか予断を許しません。

安倍晋三首相はいわゆる「村山談話」を継承するとしながら、新たな談話を出すと明言。未来志向を掲げても、歴史を修正するようなニュアンスがあれば、隣国はじめ米国などかつての連合国から反発を招くでしょう。なぜなら日本の戦後史はポツダム宣言受諾から始まっているからです。

国と国との関係は、民間交流が大きな力となるのは申すまでもありません。

岐阜県日中友好協会は、今年創立60周年を迎えます。私たちは先人らの取り組みを誇りとし、次世代に継承していく役目があると思います。

昨秋、村山富市元総理の講演会を開催できたのは、朝日大学をはじめ関係団体の協力、会員一丸となった取組みがあったればこそ。内外の評価は高く、新規会員の獲得につながると信じています。

この自信を糧に60周年を祝おうではありませんか。皆様の奮闘と協力を今一度お願い申し上げます。

年初の活動として、庄暁暉理事の骨折りで昨年に続いて名古屋春節祭（30日から2月1日まで名古屋市中区栄の久屋広場）にブースを出します。3日間で10万人近い人出が見込まれ、村山講演会などのパネル展示、本（ナツメの木は生きている）の販売など当協会を大いにアピールします。ぜひ会場に足を運んでみてください。

当協会の日中友好新春のつどいは、2月11日午前11時からホテルグランヴェール岐山で開催します。講演と賀詞交歓の2部構成で、講演は中国の環境問題をテーマに、ＮＧＯ内モンゴル緑化の会常務理事兼事務局長の神谷みどりさん（昨年の同つどいに初参加）を講師に招き、「内モンゴル　緑の再生に向けて」と題して日中関係の在り方を語ってもらいます。

賀詞交歓会には、葛廣彪駐名古屋中国総領事ご夫妻、公社日本中国友好協会の岡崎温理事長らを来賓としてお招きしています。非会員の方もお誘い合わせ、たくさんの参加をお待ちしています。

最後に会員一同、当協会にとって実りある一年であることを願ってあいさつとします。

2015年日中友好新春の集い

第一部	講演　中国・内モンゴル 緑の大地再生に向けて	NGO内モンゴル緑化の会 常務理事 兼 事務局長 神谷 みどり さん
第二部	賀詞交歓と ふれあいのひととき	【演奏】ういきょう豆 さん チャン・ビン二胡演奏団 のみなさん
日時：２月１１日（水）11:00～		会場：ホテルグランヴェール岐山

※参加費等、詳細は別紙にて

村山元総理講演会 朝日大学にて開催

戦後70年、村山談話発表20年となる2015年に向けて、（公社）日中友好協会名誉顧問の村山富市元総理の講演会を昨年11月29日、朝日大学の共催で開いた。会場の同大学講義室には200人を超す市民や学生が詰めかけ、村山談話の意義について耳を傾けた。

講演要旨は次の通り。

岐阜に来る前、土屋康夫さんが書かれた「ナツメの木は生きている」を読み、きのうは杉山幹夫会長の案内で日中友好庭園の慰霊（中国人殉難者）の碑や（中日）友好の碑を拝見したが、岐阜県は戦後いち早く日中友好に取り組み、その道を切り開いてきたすばらしい県だと感心した。国交正常化（1972年）前の中国は共産党の国だと敵視されていた。そんな時代の遺骨送還や不再戦の碑文交換は「友好の扉を開き、絆をつくる必要がある」とそれこそ命がけの事業だった。こんな努力をされた県もあると行く先々で報告させていただく。

1994年6月、自民・社会・さきがけ連立政権によって私は（当時の社会党委員長から）思いもかけず総理大臣になったが、それなりに歴史的必然性や役割があると思った。解決あるいは展望しなければならない問題に区切りをつけ、この役割に全霊を打ち込み、役割が済んだらこの内閣は終わりだという覚悟で総理を務めた。3党とも総理の意志を配慮してくれたおかげで、内政は長年の懸案だった水俣病問題を政治の責任で解決できたが、外交は未解決な問題が山積していた。

就任翌月、韓国を訪れると、日本の過去の植民地支配に対し、みな言いたいことがあっても黙っていた。元慰安婦問題に対し、「女性のためのアジア平和国民基金」を発足させた。中国は天安門事件（1989年）で、民主化の芽を摘むと愛国教育に力を入れ、歴史問題にきびしい姿勢を示すようになっていた。

東南アジアは日本を高く評価していた。（就任早々の8月、東南アジア歴訪で）マレーシアを訪れたとき、東方政策（ルック・イースト＝日本に目を向けよ）を掲げるマハティール首相から「日本はアメリカばかりでなくアジアにも目を向けてくれ」と言われた。ベトナムでは「おしん」（NHK連続テレビ小説）が放映され、長い（ベトナム）戦争から解放された人々が（苦労したおしんと日本を重ね）日本に学べと国づくりに励んでいた。

中国や韓国と温度差はあっても、歓迎の陰にいまだ日本への不信感が残っていると感じた。日本は戦争の後始末をしていなかった。日本はアジアの一員。隣国とは切っても切れない関係。戦後の成功体験から経済大国と威張ってみても、アジアから信頼される国とならなければ意味がない。それには過去の戦争や歩みを反省し、平和国家として日本の歩む道を示す必要があると考えた。

悪かったことは悪かった。過ちを繰り返さない。戦後50年の節目（8月15日）にいわゆる「村山談話」を発表した。閣議決定できなければ総理を辞める覚悟だった。幸い3党が合意、官房長官が原文を読み上げたとき、タカ派を含む全閣僚がひと言も異議を唱えず署名し閣議決定された。

さわりは《わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます》。結びは《「杖（よ）るは信に如くは莫（な）し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします》

大部分の国民は賛成してくれた。歴代内閣は村山談話を継承すると内外に表明、隣国からも歴史問題にけじめがついたと評価され世界に定着している。安倍晋三総理は第一次政権で継承と言い、靖国神社に参拝しなかった。小泉純一郎総理の靖国参拝でこじれた日中関係を修復した。しかし第二次政権では「侵略の国際定義はない」などと村山談話の見直しを示唆したが、内外の反発を受けて踏襲へと軌道修正した。

総理は国民を無視し自分の感情でものを言ってはいけない。積極的平和主義と称し、アジアの周辺国や世界を訪問、一方で中国や韓国と距離を置いている。理解しかねる。

集団的自衛権行使を認めるために、憲法解釈を変える閣議決定をした。歴代内閣は長年、憲法9条の解釈で集団的自衛権の行使を禁じてきた。安倍総理は、その積み重ねを崩し、憲法の柱である平和主義を根本から覆そうとしている。どんなことがあっても日本は戦争しない。戦後70年の平和国家としての日本の歩みは世界から尊敬されている。

村山談話が中国、韓国、アジアのみなさんと親しい関係をつくっていくことに役立つならば何も言うことはない。これだけは良いことをしたと胸が張れる。

◆ お知らせ ◆

●名古屋中国春節祭にて書籍販売

第九回名古屋中国春節祭（1月30日～2月1日）岐阜県華僑華人会ブースにて、今年も同会のご好意により書籍販売とパネル展示を行うことになりました。名古屋市中区栄久屋広場にぜひ足をお運びください。